

曹洞俳壇

選・村松五灰子

病床に移るを待てり秋日射し

青森県 高橋 敬子

評 秋の柔らかい日射しが間もなく床に届く。病む身には一日は長い。ささやかな俸^{おほけ}せを見いだしながら恙^{わざ}の日々を送る。我が身を淡々と見つめる静かな心の一句。

冬ぬくし無人駅舎の小座布団

秋田県 鈴木 ゆう

評 誰が置いたのだろう。そっけない無人駅の待合に置かれた小座布団。その優しい心遣いが作者を温かくした。それをさりげなく詠んだところに良さがある。

◆恙なく米寿や桶のまくら刈り

岐阜県 西尾美恵子

◆薬湯の厨に匂ふ霜夜かな

宮城県 木村とみ子

◆荒縄の男結びの冬支度

岩手県 上沖 貞子

◆ごまめ囁む傘寿言祝ぐ自前の歯

秋田県 小田篤恭葉

◆浜菊や蹄を埋むる寒立馬^{かんだちま}

岩手県 関合 新一

◆退院の妻に今年の米を磨ぐ

愛媛県 井上 征郎

◆豆打つや二代目となる古小槌

岐阜県 千藤 恵三

◆木守柿みんな幸せだったころ

京都府 村井 澄子

◆禅堂へペダルこぎ行く霜の朝

静岡県 富岡 一郎

◆買物の籠に小春の日はやさし

北海道 川上 初子

*選者吟

紅梅の一樹を庭の要とし

五灰子

*作句小見

「(寫生とは發見、描寫)俳句の寫生といふ事は四季の萬物の相を見て、その中からある映像を取り出して來る事をいふのである……」『虚子俳話』より。その描写に長年推敲を重ねているのですが。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

風立てばまた燃え上がる穂屑の火燃ゆるだ
け燃えよ広き刈田に 長野県 毛涯 潤

評 「広き刈田」の空間あればこそ許される炎。「燃ゆる」の動詞の活用形を連用・連体・命令形と巧みに使って昂揚感を伝え勢いがある。「風立てばまた」という詠い起こしにも惹き付けられる。「穂屑の火」に託されたものは何か。

逆光にふんわり白きススキの穂白川郷へよう
来んさつた 山口県 横川美代子

評 下の句を「ススキの穂」の言葉にした工夫が効を奏している。方言を使ったことで柔らかな印象と陰影を添えて雰圍気のある一首となった。

◆ 錦川の流れば岸によりそひて光を畳むごとき夕ぐれ
山口県 中井 清子

◆ 二百年寺を守りし杉切られ無縁仏が並び見える
秋田県 竹内 善郎

◆ 金箔の剥がれて古き仏像の木目の出づるはなほありがたし
千葉県 富野光太郎

◆ 耳遠くなりて会話の行き違ふ老いの二人の日溜まりの午後
東京都 長谷川 瞳

◆ 惚け防止の薬と思ふ針仕事効き目のありて今日の充実
三重県 野呂 と志

◆ 銀幕のラストシーンを飾るごと一陣の風木の葉巻き上ぐ
岩手県 池田 眸

◆ 野にあらば風に揺れなむコスモスの花が花瓶に挿され動
かず 福岡県 三吉 誠

◆ いつの間にか診察券が七枚に素直に老化認めて通ふ
広島県 小畑 宣之

◆ 園児らを見ているわれも見られている園児らにまた試され
ている 茨城県 太田 弘美

◆ からす瓜は芸術家なり花も実も種にも根にも趣向を凝ら
し 千葉県 甲斐 勇

* 選者詠

雨粒となりて帰れるたましいか仰向き濡ら
す母似の眉を ちづ

* 作歌小見

甲斐さんの一首「からす瓜は芸術家なり」に同感です。近頃、そのからす瓜の種を数粒もらいました。形が結び文に似ているところから「玉梓たますい」とも呼ばれる種、これまた実にも不思議な造形美。古人の言語感覚にも感心します。



大本山永平寺



釈尊涅槃会ねはんえ

静寂に包まれた深山幽谷の地ここ永平寺では、しんしんと雪が降りしきる中、日々変わることなく行持がつとめられます。

二月十五日は涅槃会が行じられます。涅槃とは梵語で吹き消すと訳され、煩惱の炎を吹き消し、一切の苦しみから解放された悟りの境地を指します。また生命の炎を消すことから死ぬこと、一般には釈尊の入滅を意味するのです。

釈尊の広大無辺なご遺徳を偲び、永平寺では二月一日より七日まで終日坐禅三昧の報恩大摂心会が行じられます。また法堂室中には巨大涅槃図が掛けられ、二月一日より十四日まで晩のおつとめの際に「仏遺教経」を誦読しご供養申し上げます。

十五日の日中には涅槃会、午後からは涅槃講式と様々な行法でご供養が営まれます。修行僧は釈尊より伝わる正伝の仏法を学び、行じることのできる喜びを感じながら法要をつとめるのです。

おのれこそ、おのれのよるべ、おのれを措きて誰によるべぞ、よくととのえし、おのれにこそ、まことえがたき、よるべをぞ獲ん

(法句経)

釈尊が入滅される間際、弟子に対して残された教えと伝わっています。自己を調えることの大切さを説かれたこの教えは、現在も永平寺の修行生活に息づいているのです。

ご本山だより



大本山總持寺



涅槃会



修行僧の上山

仏殿での節分追儺式

胸なりて われ踏みがたし 氷よりすめる 大雄宝殿の床

(与謝野晶子)

冒頭の和歌は建立されたころの總持寺仏殿を、歌人と謝野晶子さんが訪れた際に詠んだものです。仏殿は大正四（一九一五）年の建立です。ちょうど今から一〇〇年前、峨山禪師五百五十回大遠忌の年でした。

さて、年明け寒の入りから連日修行されていた「寒行托鉢」が、二月二日で終了し、翌三日には春の訪れを告げる「節分追儺式」が盛大に修行されます。

この節分追儺式は例年大祖堂に於いて行われていますが、今年は大祖堂が修復工事中（三月末まで）のため、仏殿が会場となります。

十五日はお釈迦さまのご命日、「涅槃会」です。これにちなみ、十二日から十四日まで「涅槃会報恩摂心」が修され、当日は仏殿に大涅槃図を掲げて江川禪師さまを大導師に法要が営まれます。また、冬安居が終了し、修行に節目をつけた僧が出身地に帰る時期ともなり、入れ替わりに新しい修行僧が続々と上山して来ます。

新しい修行僧にとっては「峨山禪師六百五十回大遠忌」という記念すべき年の上山となります。きつと心に一生刻まれる尊い報恩安居になるでしょう。